

史遊会通信

NO. 197 年 日
成 23 27
月 3 行
平 3 発

事務局
03-3712
0651
下山田方

自由執筆

初学 六首

鯨 游 海

東北關東大震災即事

(平起し・上平声一東)

天崩地裂濁浪充 天崩れ地裂け濁浪充つ
街没船顛家漾沖 街没し船顛り家沖に漾ふ
鶏犬不鳴燈不點 鶏犬鳴かず灯び点らず
未看人影月明中 未だ看ず人影月明の中に

鶏犬の鳴く声は老子以来「平和な村里のようす」を表現する象徴的辞句となった。

太古から人と鶏犬は共存していたのだ。

これを承けて神仙伝には「鶏犬相聞」と、また陶淵明の桃花源記にも「鶏犬之聲相聞」と引用している。街や村里に夜が来ても灯火が点らない異常。未曾有の大震災の惨状をテレビの映像で具にみ、慄然とした。

獨裁國與日本國 (仄起し・上平声十三元)

一代梟雄亡國元 一代の梟雄亡國の元

須臾政變亦何論 須臾の政變亦何をか論ぜん

短長過度猶不及 長短過ぎたるは及ばざる

が猶し

萬事中庸是至言 万事中庸是至言なるかな

梟雄は残忍で勇猛な人物。邪まで勢いある指導者。梟はふくろうのこと。余り良い意味で使われる言葉でないのは、梟が不気味な鳥の為か？ 長期政権は必ず腐敗するが、我が民主主義日本も宰相の人材に恵まれない。長短何れも「過猶不及也」だ。

忠山人茶會即事 (仄起し・上平声十五刪)

幕薩恩讎幾度還 幕薩の恩讎幾度還りしか

不圖相對尺餘間 図らずも相對す尺余の間

沈香壺與海舟軸 沈香の壺と海舟の軸

方丈唯聽茶筌閑 方丈に唯だ聽く茶筌の閑なるを

例会のお知らせ

◎ 4月例会

日時 平成23年4月27日(水)

午後2時〜4時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第1研修室

講演 高橋由貴彦氏

テーマ 支倉常長の教皇パウロ五世との謁見とローマ市民

の驚嘆

自由執筆 新井 宏・太田精一

山本鎮雄の諸氏

締切 4月末日

★東北・関東大震災による電力不足で社会教育館の夜間の使用が中止になりました。取りあえず3月・4月との区からの連絡でしたが、5月以降も正確なところはわかりません。

3月の例会は中止にし、4月は取り敢えず水曜日の午後にしましたが、今後のことについては、幹事会からのご相談があります。

かねて親炙する茶人の忠山人氏から茶会に招かれ末席を汚したときの作。

恩讎 || 情けと怨み。ここでは幕府と薩摩の離合集散の歴史をいう。なお讎は俗字。

沈香壺 || 薩摩陶きの華麗な蓋付き中型壺。海舟軸 || 勝海舟が揮毫した「濯秀」の掛け軸。濯は①洗う②現わす③大の意がある。

茶室に飾られた壺と掛け軸が題詠の対象だが、同時に幕末の歴史を寓意、間接的な抒情を表現した。

☆恩讎の彼方にまみえ何懐ふ

沈香の壺海舟の軸

泊加賀屋（仄起し・下平声二蕭）

夙聴彈琴風雅調 夙に聴く彈琴風雅の調べ

飛天像壁麝香漂 飛天像の壁に麝香漂う

醉湯睡足醒咖啡 湯に酔ひ睡り足り咖啡に

醒む

加賀今知絹路要 加賀今知る絹路の要なるを

社員旅行で北陸路に遊んだ。加賀屋は

「おもてなしに優れた宿」として数十年間首位の座に在るといふ。社員研修の一環として選んだが流石期待通りの接遇を受けた。

早朝、ラウンジ飛天の間で咖啡を喫した。窓外には波静かな日本海が目路の彼方に拡がり、その向こうに在るであろう大陸を想像した。そう、ここは絹路の接点の港街。

加賀の熟成した雅の文化は、恐らく前田利家公以前からの東西融合の証であろう。

☆奥床し加賀の雅を今ぞ知る

絹路のるつぽなりしを

祝吉田先生敏敷（仄起し・下平声七陽）

夙夜研精遂結昌 夙夜の研精遂に結昌す

掌中瑞寶菊花章 掌中に瑞宝菊花の章

何人使子驅天命 何人ぞ子を使って天命に驅

らしめたるは

誰有糟糠妻與鵲 誰か有る糟糠の妻と鵲

と（反語）

吉田先生は火薬学、花火学の世界泰斗

で東大名誉教授、前足利工業大学学長。去年敏敷の栄に浴された。私とは同人誌の縁

で知己を得、酒席を共にして戴ける仲間とな

った。先生はお酒をこよなく愛される。

研精 || 精しく究める。孔安國・尚書序

「研精覃思 博考輕篇、簡野道明・字源

縁起「研精覃思 夙夜拮据 十数年の久し

きに彌る」より引用した。鵲は杯。

☆佳き報せ糟糠の妻に先ず告げん

夜は二人して鵲に聴かせん

歡喜三十有三人生還

（仄起し・上平声七虞）

地底磐崩閉鎖夫 地底の磐崩れ鎖夫を閉ず

貫通千丈一縷途 貫通したり千丈一縷の途

萬人吞息生還劇 万人息を吞生還の劇

只縷蛛絲破斷無 只縷る蛛糸の破斷なきを

チリ鉞山の救出ドラマは世界中の耳目を

集め、且つ劇的な成功を収めた。しかもその

模様が逐一同時放映され感動を共有した。

一縷 || 一本の細い頼り無げな糸

蛛絲 || 蜘蛛の糸。承句の一縷と呼応し救

出現場の緊張感を表現した。勿論茶川龍之

介の小説「蜘蛛の糸」を意識して用いた。

☆鉞夫らの縋りて登る蜘蛛の糸

南無釈迦牟尼仏断つこと勿れ

かく漢詩の詠懐は、故事や歴史を引用す

ることで奥義を深め、歴史も亦文学に昇華

する。

自由執筆

日中字義の相違

「客」その他

中込 勝則

中国の漢詩文を読むと「客」という言葉が出てくる。この「客」という言葉に、私が最初に興味を持ったのは、昭和二十七年、私が小学校六年生のとき。第十五回夏季オリンピックがフィンランドのヘルシンキで開かれ、敗戦国日本も戦後初めて参加した。このとき、当時NHKアナウンサーであった和田信賢氏も実況担当のため派遣された。氏は、NHKが設立された時のアナウンサー第一期生（昭和九年）。

昭和十四年一月十五日には大相撲の実況を担当していたが、当日は、時の無敵の横綱双葉山が安芸の海の挑戦の前に屈し七十連勝をはばまれた、その世紀の一戦を実況したことで知られる。

また、昭和二十年八月十五日には、天皇の終戦玉音放送に続いて終戦の詔勅を奉読した。氏のアナウンス振りは芸術品といわれ、その名声は全国にとどろいていた。

ところが、氏はヘルシンキからの帰途立ち寄ったパリで、急に病を発し、その地で亡くなった。往年四十歳。当時の新聞各紙は「和田信賢氏、パリで客死」と、この名アナの死を大々的に報じた。大きな活字だったから、いかに小学生だった私でもいやでも目に入った。

ただ、そのとき感じたのは、「客死」とは、どういうことをいうのか。氏は「お客さん」としてパリに入ったのではなく、単に帰国の途次であったのに、なぜ「客」としての死といわれるのかという疑問である。これについて誰かに質問すれば分かったのかもしれないが、そのまま、長く心内に残っていた。長じて、漢詩文に親しむようになって、その疑問は氷解した。

中国語で「客」とは、日本的な意味での「お客様」と言う意味もないわけではないが、多くの場合は、一時的か長期かを問わず、「旅にある人。故郷を離れている人」をさすのである。

例を挙げると

- ① 潯陽江頭、夜、客を送る。楓葉、荻花、秋、瑟瑟（「琵琶行」白樂天）
- ② 壬戌の秋、七月既望、蘇子（＝蘇軾）

客と舟を泛べて、赤壁の下に遊ぶ

（「前赤壁賦」蘇軾）

- ③ 年年 至日 長く客と 為り 忽忽たる窮愁 人を泥殺す（「冬至」杜甫）

- ④ 客有り、客有り、字は子美。白頭亂髮、垂れて耳を過ぐ（「乾元中同谷縣に寓居して作れる歌」杜甫）

- ⑤ 万里悲秋、常に客となり、百年多病、独り台に登る（「登高」杜甫）

そこで、これらの句をみると、①は、唐の時代、江州の司馬であった白樂天が九江ちかくの湓浦江の湊に、客人を送ったときの詩。②は、秋の名月のとき、三国志の決戦で名高い赤壁の近くの揚子江に客と船を泛べて遊んだときの光景を詠ったもの。

- ①、②は、日本語での「客」に近い。
- ③④⑤は、杜甫が長安から四川省へ長江流域に流れていく長い旅の途中を詠った詩であるから、紛れもなく中国的意味の「客（かく）」である。和田アナは旅の途中であったから「客死（かくし）」といったのである。

日中字義の違う字は他にも沢山ある。例えば「鬼」。日本では大江山の鬼、桃

太郎がやつつけた鬼など強いものの代名詞であるが、中国では「死者・亡霊」の意味で、「古来白骨人の収めるなく、新鬼は煩冤し旧鬼は哭す」（「兵車行」杜甫）等という。

また、「柏」も、日本では葉を柏餅に使う柏のことでブナ科の落葉樹だが、「丞相の祠堂何の處にか尋ねん。錦官城外柏森森」

自由執筆

「たたら」語源考

柴田 弘武

「たたら」とは日本古来の製鉄法をさす言葉であることはよく知られています。外国でも「タタラファーン」と言われ、日本の原料になる鉄を造る、秘密裡に伝えられた製鉄技術」ということで、案外ポピュラーな言葉になっているそうです（窪田蔵郎『鉄の民俗史』）。

ところがその語源となるとさまざまな説があり、いまだ定説といったものはなさそうです。そこで現在私なりに到達した結論

（「蜀相」杜甫）などと、中国で言う「柏」は、ヒノキ科の常緑樹で「このてがしわ」のことをいう。

日本で「鮎」と書けば、「アユ」のことだが、中国では「なます」のこと。

その他にも、字義の異なる字は沢山あって間違いやすいので注意も必要だが、これも又、漢詩文を読む楽しみの一つである。

を披瀝してみたいと思います。

文献的にたたらが確かめられるのは日本書紀神代巻に大三輪神、またはミシマミゾクヒの子として姫踏鞴五十鈴姫（古事記では比売多々良伊須氣余理比売で、その母の名も勢夜陀多良比売）です。紀は「踏鞴」これをば多々羅といふ」と註釈しています。

また神功紀等に出てくる「踏鞴津」「多羅」もあります。いずれも韓国釜山市南端の洛東江川口にある多大浦（タデッポ）とされています。今井康男氏はそれら文献を渉獵し、「たたら」語義の研究」を著しました。氏は多大浦や古代からの地名とされる福岡市の多羅浜、防府市の多々良浜、千葉県南房総市の田多良海岸などを現

地調査した上で、それらが似たような「風」が集約されて強く吹き抜ける地形」であることを確認し、結論的には神功紀（仲哀九年条）に「鼓吹起声、山川悉振る……」とあるように、それは「踏・踏」鞴ではない単なる「鼓」の「ふいご」を意味する、朝鮮・韓国の古代言葉であった、としています。しかしながら韓国・朝鮮には「ふいご」を「たたら」と言った痕跡はなさそうですし、「たたら」地名も存在しないようなので、私はその結論には納得できません。

ちなみに韓国の学者李寧熙（イ・ヨンヒ）は「たたら」の語源は「ダラダラ」で、「非常に熱すること」をあらわす韓国語「ジャルダラ」の古語だとしています（仕田原猛『李寧熙が解いた古代地名を歩く』、「まなほ」25号）。

また金容雲（キム・ヨンウン）は『日本語の正体』で、「たたらもまた韓国ドドリ（ダ）から出たものです。彼らは鉄を叩いてつくるのでドドリ（ダ）が訛って「たたら」と呼ばれたのです。……釜山の多大浦（タデポ）はすなわち、たたら輸出港でもありました。「多大」の韓国音「ダデ」はもちろん「ドドリ」とつながっています。

と書いています。

いずれも魅力ある説ですが、韓国・朝鮮の例が少なく、いま一つ説得力に欠ける怨みがあるようです。

福土幸次郎は『原日本考』で、皮囊の風を吹き出す音から来た。風がドツと吹くとか、とどろにとか、轟くとか、わが日本語中に関係音があり、タタ或はタトが元来の形である。タタラの「ラ」は日本語に普通な接尾語で別に意味がない。としています。

吉田金彦は『京都の地名検証』で、古代韓国語タタラは、山を意味するタルの重複形タルタラの変形で、山々を現している。と書いていますが、果たして古代韓国語にそういう言葉があるのかどうかや疑問ですし、海岸部にあるたたら地名にはそぐわない感じがします。

そのほか古くは安田徳太郎のサンスクリット語の「タータラ」熱・溶鉱炉」説やタール人由来説等さまざまありますが、私が注目するのはアイヌ語です。即ち菅原進氏の『アイヌ語地名解』では、岩手県の松尾村多々良と玉山村多々良を取り上げ、アイヌ語の「タラタラク・イ」は「石多くある所」又は「タルタルケ・イ」↓「タッ

タルケ・イ」で「踊り踊りする者」の意かどちらかであるとし、現地を調査してそこに製鉄にまつわる何らの痕跡もないことから、前者は「石多くある所」と解釈でき、後者は聖なる姫神山から善男・善女が飛び跳ねて歌い踊りながら坂道を下りつつある意味と解釈できるとしています。

また鈴木健氏は「縄文語からヤマト語へ」の中で、「(アイヌ語の) tarlar 踊り踊りする所」と書いています。氏はアイヌ語は縄文語を引き継ぐ言葉であるとし、記紀や万葉集の一見不可解な言葉、例えば万葉集の「石ばしる垂水の：」の「たるみ」は tar (踊る) 水(み)、で

自由執筆

考古学の魅力

(友の会) 漆原 直子

私は考古学が好きである。その理由は二つある。

まず、一つ目は、小学生の時に『世界の七不思議』という図鑑をよく読み、古代の

tarlar (踊り踊りする水のよう)と、アイヌ語で解釈すれば理解できることを、多くの事例を挙げて解いていて説得力があります。

そうすると縄文以来の古代人は「タルタルケ」踊り踊りする者」という言葉を日常使用していたことが考えられます。そして六世紀に製鉄のため足踏み輪が導入された時、その足踏み輪を踊るようにあやつる男たちを見て、「あの人たちはタルタルケだ」と言ったのではないのでしょうか。それが訛って「たたら」の言葉になったように思うのですがどうでしょうか。

謎とされる文明に興味を持つようになっていた。印象的だったのは、ナスカ文明の地上絵、インカ文明のマチュピチュの遺跡、マヤ文明の密林の中のピラミッド、イースター島のモアイ像、カンボジアのアンコールワット、イギリスのストーンヘンジ等々、なぜ、人々はそのような文明を築き、また滅びたのか、非常に不思議に感じていた。いずれも、ほとんど歴史として記録に残さ

れておらず、自然の中に埋もれた、又は、放置された状態の「遺跡」である。何百年、何千年という、人々の記憶からも消えてしまった文明が、「遺跡」として存在している事が驚異であり、言い知れぬ魅力であり、その真相に迫るために、考古学者になりたいたと思っていた。

高校の時の現代国語の教科書に、堀辰雄の『浄瑠璃寺の春』という短編が載っていて、その中に、次のような一節があった。

「自然を超えんとして人間の意思したすべてのものが、長い歳月の間にほとんど廃亡に帰して、いまはそのわずかに残っているものも、そのもとの自然のうちに、そのもの一部に過ぎないかのように融け込んでしまうようになる。そうして其処にその二つのものが一つになって―いわば第二の自然が発生する。そういう所にはすべての廃墟の云いしれぬ魅力があるのではないか?―そういうパセティックな考えすらも(それはたぶんジムメル(※)あたりの考えであつたらう)今の自分にはなんとなく快い、和やかな感じで同意せられる:」

*ゲオルク・ジンメルは、『廃墟』というエッセイの中で次のように書いている。「: 廃墟の魅力とは、人工がついには自然の産物のように感受されるということである。風雨にさらし、浸食し、崩落し、植物を成育させて、山の形態を定めるのと同じエネルギーが、廃墟においても力強く働いたということになる。」

私が遺跡に魅かれる理由はまさにこのことだと思った。私は、人類の文明の発展と自然環境の破壊とは、正比例の関係にあると思っている。人間は自分達の都合のいいように、自然を改変してきた。しかし、人間は自然の一部であり、自然なくしては生きていけない。自然を改変しすぎることによって、自然破壊をすれば、いずれ、自然から大きくなってしまった。それを端的に表しているのが、「遺跡」である。天災や人災等の結果、その場所に住めなくなつて移動して行く。もはや人が住まなくなるか、または、別の文明が築かれるかする。例えばインダス文明のモヘンジョ・ダロは、レンガを作るために森林を伐採しすぎて、砂漠化を招いて滅

んだとされる。現在残る遺構は、すっかり砂漠の中に溶け込んでいく。マヤ文明のピラミッドも密林の中に作られたが、何らかの理由で衰退し、今では密林に飲み込まれている。「第二の自然」の誕生である。

日本においては、イワクラやストーンサークル、神籠石、吉備の「鬼の城」のような山城、古墳、創建時のまま残されているような古社・古寺等に「第二の自然」を感じる。イワクラはアニミズムとして、自然物(巨石や泉)を崇拜したものだが、中には人為的に造られたと思われる物もある。しかし、日本の遺跡の場合、考古学的な発掘調査は大抵、道路や建築等の開発を前提として行われている。例えば、幹線道路沿いに、点々と遺跡が存在している事がある。こうした「遺跡」は、保存のため再び埋め戻されるか、遺跡公園等として整備されるかするが、最悪な事態として、破壊され消滅してしまう。考古学が「遺跡」の破壊の先棒を担がないことを願いたい。私は、「遺跡」の破壊は、自然破壊にも等しい行為だと思ふ。

「遺跡」は、後世への遺産でもある。以前NHKで『未来への遺産』という番組(一

九七四年三月から七五年十二月まで、NHK放送五十周年記念番組として放送された。

「文明はなぜ栄え、なぜ滅びたか」をテーマとしている。が、あつたが、「遺跡」の魅力がよく表わされており、「遺跡」は未来に残して行くべきだと主張している。ただし、「遺跡」の保存のあり方について、公園としてあまりにも整備されすぎたり、復元も（より多くの人に理解をしてもらうためには必要だと思ふが）学術的な価値は変わらないが、現代の技術が加えられたことにより、「遺跡」としての魅力は半減してしまう。

私にとって「遺跡」は、時の流れが感じられるような、ありのままの状態で維持されているのが一番魅力的なのである。

次に、私が考古学が好きなの二つ目の理由として、自分がどこから来たのか、なぜ存在しているのかを考える一つの縁になると思うからである。子供の頃から、自分という意識がなぜあるのか、なぜ私の両親はこの人達なのかと考えるようになり、ひいては、なぜ自分は他の国ではない、日本に生まれたのか、そもそも日本人はどこから

来たのか、日本の国はどうしてできたか、等々：、考えるようになっていた。

私の父の母（祖母）の実家は、「安藤」といって、伊達藩の下級武士であった。仙台市にある墓碑名には、貞享年間に没した「安藤次郎右衛門」の名が筆頭にある。いつ頃から安藤を名乗っているかはわからないが、「安藤」は奥州の「安倍氏」の流れをくむだろうとされており、遠く遼れば、蝦夷につながるかもしれない。また、その祖母の母方（曾祖母）の実家は、「内藤」といって、福井藩の御殿医をしていたそうである。本籍地は丹生郡上糸生村となっている。

「丹生」という地名は、日本各地にあり、丹波・辰砂・水銀の産地と関係があるとされる。私の父は以前、新田義貞の流れをくむかもしれないと話していたことがあつたが、詳細はわからない。内藤家がいつの時代からそこに住みだしたのかはわからないが、私の勘だが、こちらは渡来系かもしれない。しかし、こうしたことは推測であり、個人の「ルーツ・歴史」を辿ることにには限界がある。

近年、遺伝子研究が急速に進み、遺伝子情報の解析により、ある集団のルーツをた

どることのできる遺伝子がわかった。それは親の持つDNAがそのまま子供に伝わる

とされ、母親から伝わる「ミトコンドリアDNA」と父親から男性に継承される「Y染色体DNA」である。分子人類学の篠田謙一氏の著「日本人になった祖先たち」によると、「ミトコンドリアDNA」は、約十数年前にアフリカで発生した新人が、アラビア半島を経由して欧州とアジア地域に拡散し、日本列島には、後期旧石器時代にあたる四万〜三万年前に到達したとされる。「Y染色体DNA」についても、同じような時の流れを経ているとされるが、まだ、

「ミトコンドリアDNA」ほど解析が進んでいない。「ミトコンドリアDNA」での分類を元に、日本人を時代や地域による集団に分けてみると、現代の日本本土人集団は朝鮮半島や中国東北部の集団と似ているという。アイヌの人たちや沖縄の人たちについては、アイヌは北方のオホーツク文化圏とされる地域の集団と近く、沖縄は南九州の人たちに近いとされる。また、縄文人と言つても、北海道と関東の縄文人骨の「ミトコンドリアDNA」の構成分布を比較すると、双方には隔たりがあるとされる。

それでは、記紀や風土記等にある先住民とされる、土蜘蛛、や、蝦夷、と呼ばれる人達のDNA構成はどのようなものであったのだろうか？ 古人骨のDNA情報は、まだサンプルが少ないため、もっと情報を収集して、データベース化する必要があるという。

考古学は、文字や伝承等に残された人々の記憶を、地表面のみならず、地下から掘り起こして探り、歴史像を描くための骨格を作る。発掘された遺物・遺構を、金属学・地質学・植物学・人類学及び分子人類学（古人骨の古代DNAの研究）等の自然科学的手法にてアプローチし、これらを「骨」とする。その上に歴史書等の文献史学・神話等の伝承学や民族学、言語学や地名学等の人文系科学的手法で、肉付け^①をしていく。私は、考古学は、主観に囚われることなく客観的な事実の蓄積を行うことができる学問だと思っている。が、その事実をどう解釈するかで、歴史像に違いが出る。歴史像は、事実をどのように取捨選択するかで、これには主観が入り込むと思うが、描かれるものに差異が生じてくる。それはあくまでも仮説として、常に検証しながら、

実像に迫る努力を怠らないでほしい。

金属器において、弥生時代の青銅器に關しては、その金属材料である鉛の生産地を「鉛同位体比（鉛には質量数の異なる四種類の同位体があり、産地によってその混合比比率が違う）」という方法で推定する研究がなされ、古人骨のDNAと同じような意味合いを持つていると思う。この青銅器と同じ層から発掘された古人骨のDNAのルーツとどうマッチングするか、またその背景としてその地域に残されている伝承とどうクロスできるか、お互いに比較研究し合って、裏付けを取り合うことで、私達の歴史の解明をすることができるとは思えないか。

以上、私がこれまで温めておいた思いを整理してみた。考古学の魅力とは、「遺跡」の魅力を探り、変えられない過去の歴史を探り、そこから現代を見つめ直して、未来を展望して行く、ことに尽きる。

【参考文献】

- ・『浄瑠璃寺の春』 堀辰雄著
- ・『ゲオルク・ジンメルエッセイ集』より
- ・『廃墟』 ゲオルク・ジンメル著

・『未来への遺産』全5集 NHK取材班
 ・『日本人になった祖先たち』篠田謙一著
 ・論文『鉛同位体比による青銅器の鉛産地推定を巡って』 新井宏著

事務局だより

※3月の例会は諸般の事情により中止になり、ご迷惑をお掛けしました。あの凄まじい光景をみるかぎり、中止もやむを得ないとご納得いただけたかと存じます。会員のなかにもご親戚などに災害を受けられた方がいらつしやるのではないのでしょうか。お見舞い申しあげます。

さて、災害の影響は当会の活動にも出てまいりました。会場の都合でしばらく夜間の活動ができません。幹事さんからお話があるとは思いますが、今後史遊会がどんな方向で進むのか一考のチャナスかもしれません。

※今回の史遊会通信は講演要旨がなかったもので、長文でしたが、友の会しかも女性会員の投稿原稿を載せさせていただきました。漆原さん、今後よろしく！